

エレミヤ書47-49章「ユダのところに来た諸国」

1A ペリシテ 47

2A モアブ 48

1B 辱め 1-10

2B 安逸 11-25

3B 高慢 26-39

4B 恐怖 40-47

3A アモン他 49

1B アモン 1-6

2B エドム 7-22

1C 役に立たない知恵 7-13

2C 小さくされる民 14-22

3B ダマスコ 23-27

4B ケダル・ハツオル 28-33

5B エラム 34-39

本文

エレミヤ書 47 章からです。私たちの学びは、諸国の民に対する神の預言に入っています。バビロンがユダとその周囲の国々を征服していく中、主がそれぞれの国々に御心を持っておられました。前回は 46 章、エジプトに対する神の言葉が書いてありました。エジプトはバビロンと戦い、またユダがバビロンに反逆するのを手助けしました。その中で、彼らが自分たちにはもはやなくなっている、過去の力や栄誉に拠りすがっていること、また自分たちの偶像の神々に仕えていることを示されました。

そして私たちは、その他の数多くの国々に対する言葉を読みます。彼らは異邦人であり、神の民ではないですが、それでも主から語られていた言葉がありました。27 章 2-8 節までを読みます。「主は私にこう仰せられる。「あなたはなわとかせとを作り、それをあなたの首につけよ。そうして、エルサレムのユダの王ゼデキヤのところに来る使者たちによって、エドムの王、モアブの王、アモン人の王、ツロの王、シドンの王に伝言を送り、彼らがそれぞれの主君に次のことを言うように命じよ。『イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたは主君にこう言え。わたしは、大いなる力と、伸ばした腕とをもって、地と、地の面にいる人間と獣とを造った。それで、わたしの見る目にかなった者に、この地を与えるのだ。今、わたしは、これらすべての国をわたしのしもべ、バビロンの王ネブカデネザルの手に与え、野の獣も彼に与えて仕えさせる。…彼の国に時が来るまで、すべての国は、彼と、その子と、その子の子に仕えよう。しかし時が来ると、多くの民や大王たちが彼を自分たちの奴隷とする。…バビロンの王ネブカデネザルに仕えず、またバビロンの王のく

びきに首を差し出さない民や王国があれば、わたしはその民を剣と、ききんと、疫病で罰し、…主の御告げ。…彼らを彼の手で皆殺しにする。」

ここに書かれているように、彼らはバビロンに対して戦うために連携するため、それぞれの国が使者をユダの王のところに遣わしています。その時にエレミヤが、縄と枷を自分の首にかけて、バビロンに捕え移されるのだから、彼に従いなさいと語っているのです。彼らの国々にも、ユダでそうであったように、占い師などが偽りの預言をして、バビロンから救われることを言っていました。けれども、反抗すれば剣、飢饉、疫病で罰せられるとエレミヤは宣言しています。主は、ユダ、つまり契約の民に対するように、はっきりと何を罪とみなしているか、これらの国々に語っておられませんが、それでも彼らのそばにいる異邦人として、一般に与えられている神の知識に基づいて、彼らを罰しておられます。

そして、周辺諸国への預言は、私たちはアッシリヤがイスラエルとユダに攻めてきた時も、同じように彼らも攻められているところをイザヤ書の学びで読みました。そして中身がとても似ています。つまり、彼らはやはり、すでにイスラエルの神から預言の言葉を受けていたのです。その教訓を学ぶことができたのです。神を、既に知ることができたにも関わらず、同じような形で裁きを受けています。

1A ペリシテ 47

47:1 パロがまだガザを打たないうちに、ペリシテ人について、預言者エレミヤにあった主のことば。
47:2 主はこう仰せられる。「見よ。北から水が上って来て、あふれる流れとなり、地と、それに満ちるもの、町とその住民とにあふれかかる。人々は泣き叫び、地の住民はみな泣きわめく。47:3 荒馬のひづめの音、戦車の響き、車輪の騒音のため、父たちは氣力を失って、子らを顧みない。
47:4 すべてのペリシテ人を破滅させる日が来たからだ。その日には、ツロとシドン、生き残って助ける者もみな、断ち滅ぼされる。主が、カフトルの島に残っているペリシテ人も破滅させるからだ。
47:5 ガザは頭をそられ、アシュケロンは滅びうせた。アナク人の残りの者よ。いつまで、あなたは身を傷つけるのか。」

ペリシテに対する預言です。ペリシテは、今のガザ地区のところ、地中海沿岸地域の南にある部分です。ガザはペリシテ人の町の一つですが、「パロがまだガザを打たないうち」とあります。おそらくパロのネコがカルケミシュに行く時にペリシテ人と戦ったのではないかと考えられますが、それは609年のことです。そして、ネブカデネザルがアシュケロンを倒したのは、604年のことです。ですから、ペリシテはエジプトとバビロンのどちらからも攻められ、破壊されました。

まだパロが来る前の時に、北から来る水、すなわち軍隊の流れをエレミヤは預言しています。バビロンのことです。ここにあるように、全ての住民に対する徹底的な破滅をバビロンがもたらします。住民たちの泣きわめきと恐怖が特徴です。「ツロとシドン」は、ペリシテの北にある同じく地中

海沿岸の国々ですが、彼らに助けを呼びました。ところがツロとシドンもバビロンに倒れます。さらに、「カフトルの島」ですがクレテ島のことで、ペリシテ人は今のガザ地区の辺りにいて、長いこと士師の時代からイスラエルの内部に入って攻めてきましたが、彼らの元は地中海に浮かぶ島でした。その島にいる住民までもが殺されるという、まさに民族浄化のような破壊です。「アナク人の残りの者」とありますが、かつて巨人として生きていた者たちで、イスラエルの民はかつてアナク人を見たといって、約束の地に入るのを恐れました(申命 1:28)。ゴリヤテのような巨人がペリシテにはいたのです。

ところで、使徒の働き 8 章に、伝道者ピリピが御霊によってガザに下る道に行きました。そして括弧書きで、「このガザは今、荒れ果てている。」とあります(26 節)。これがエレミヤの預言と無関係ということではないでしょう。

そして、「ガザは頭をそられ」、「身を傷つける」とありますが、これは彼らが悲しみや嘆きを表している姿です。かつてバアルの預言者が、その名で叫び求めている時に身を傷つけていましたね、おそらくペリシテ人も自分の神々に叫び求めて、身を傷つけています。彼らはまことの神、イスラエルの神に拠り頼むことができたはずなのに、それでも言い伝えの神々に拠り頼みました。そして、その神々が役に立たないことを知りました。

47:6 「ああ。主の剣よ。いつまで、おまえは休まないのか。さやに納まり、静かに休め。」47:7 どうして、おまえは休めよう。主が剣に命じられたのだ。アシュケロンとその海岸・・そこに剣を向けられたのだ。

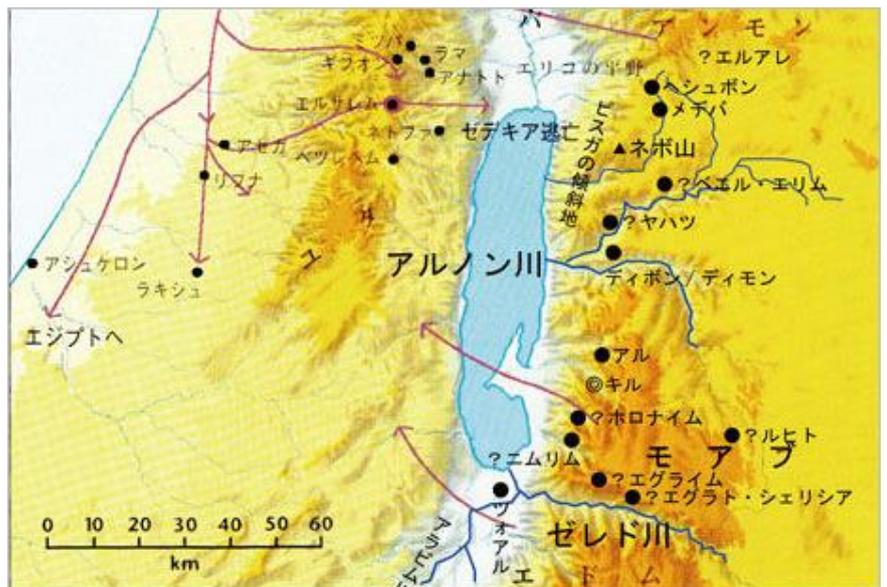
バビロンの剣なのですが、主は明確にこれをご自分の剣としています。つまり、主はバビロンがここを剣で人々を倒すことに、ご自分の御心を強く置いておられるということです。そして、それを止めることに対して、主は「どうして、おまえは休めよう」と言われています。主が裁かれるとお決めになっているのに、そうやってはいけないとするのは御心ではありません。どんなことがあっても、平和があればよいのだというのは、一見御心のように、そうではないのです。私たちは、こうした剣という悪いことの中にも、その背後には神が何かの御思いがあってそれを許されているということを知らないといけません。

2A モアブ 48

1B 辱め 1-10

48:1 モアブについて。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「ああ、悲しいかな、ネボ。これは荒らされた。キルヤタイムもはずかしめられ、攻め取られた。そのとりでは、はずかしめられて打ちのめされた。48:2 もはやモアブの栄誉はない。ヘシュボンでは、これに悪事をたくらんでいる。『行って、あの国民を断ち滅ぼして無き者にしよう。』マデメンよ。おまえも黙る。剣がおまえのあとを追っている。」48:3 聞け。ホロナイムからの悲鳴。「破壊だ。大破滅だ。」と。48:4 モアブは

打ち破られた。その叫びはツォアルまで聞こえた。48:5 ルヒテの坂を泣きながら嘆きが上る。敵はホロナイムの下り坂では、いたいたしい破壊の叫びを聞いた。48:6 逃げて、おまえたちのいのちを救え。荒野の中の野ろばのようになれ。48:7 おまえは自分の作った物や財宝に拠り頼んだので、おまえまで捕えられ、ケモシュはその祭司や首長たちとともに、捕囚となって出て行く。48:8 荒らす者がすべての町にはいつて来る。一つの町ものがれること



とができない。谷は滅びうせ、平地は根絶やしにされる。主が仰せられるからだ。48:9 モアブに翼を与えて、飛び去らせよ。その町々は住む者もなく荒れ果てる。48:10 主のみわざをおろそかにする者は、のろわれよ。その剣をとどめて血を流さないようにする者は、のろわれよ。¹

モアブに対する預言ですが、午前礼拝でお話したようにモアブは、死海の東にある高原にあり、アルノン川からゼレデ川の間にあるところを主としています。けれども、アッシリヤがヨルダン東部にいるイスラエル人を捕え移してからは、アルノン川以北も自分たちの所有としました。ここに数多くの町々が出てきますが、次第に北のほうから南に逃げているモアブ人たちの様子を伺うことができます。初めに、「ネボ」が荒らされたとありますが、モーセが最後に約束の地を見たネボ山のネボのことです。アルノン川より北にあります。バビロンが攻めてきて、国民が瞬間に断ち滅ぼされることを預言しています。

彼らが裁かれた理由が7節に書いています。「自分の作った物や財宝に拠り頼んだ」であります。モアブが豊かにされていて、それで主なる神を認めず、その言葉をないがしろにしていたことが伺えます。そしてこのように豊かに与えられているのと、「ケモシュ」というモアブ人の神はつながっています。自分たちが安らかにしていれば、する必要のない快樂を求めます。ケモシュは快樂を求めるような神です。「自分が神は要らない、楽しい事をしていけばそれでいいのさ。」とするならば、ケモシュを拝んでいるのです。そして大事なものは、偶像は、いざという時に助けてもらえません。祭司と共に、ケモシュも捕え移されます。そして、その土地が谷であり、平地であるとあるのは、モアブの特徴です。平地、あるいは高地であり、そしてアルノン溪谷とゼレデ溪谷があります。

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%83%A2%E3%82%A2%E3%83%96%E3%81%AB%E5%AF%BE%E3%81%99%E3%82%8B%E4%B8%BB%E3%81%AE%E3%83%9F%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%88>

そして、大事な言葉があります。「主のみわざをおろそかにする者は、のろわれよ。」とあります。「おろそかにする」とは、「神は何かしているかもしれないが、私には重要ではない。」という態度です。主ご自身への思いが、他の楽しみがあって二の次になっている姿です。神には思いは確かにあるけれども、一番にはなっていません。これは、呪われるべき態度だ、ということです。そしてもう一つも大事ですね、「その剣をとどめて血を流さないようにする」とあります。先ほどのペリシテへの裁きに対する言葉と同じです。どんなことがあっても、和を求めるとのこと。何ら問題が起こらないことを、もっと大事な価値観としていることです。安らかではないこと、剣が来ること、こういったところにむしろ、神は何かをしておられると知って主を求めるとは、何も問題がないように収めようとする態度です。

2B 安逸 11-25

48:11 モアブは若い時から安らかであった。彼はぶどう酒のかすの上にじっとたまっていて、器から器へあけられたこともなく、捕囚として連れて行かれたこともなかった。それゆえ、その味はそのまま残り、かおりも変わらなかった。48:12 「それゆえ、見よ、その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、彼に酒蔵の番人を送る。彼らはそれを器から移し、その器をあけ、そのつぼを砕く。48:13 モアブは、ケモシュのために恥を見る。イスラエルの家が、彼らの拠り頼むベテルのために恥を見たように。」

モアブの問題が、問題が何もないということだったことを午前礼拝で学びました。そして、再びケモシュを崇拝していたことを、この時に恥を見ると言っています。イスラエルがベテルにおいて、ダンと共に金の子牛を据えて、偶像礼拝をしたために、その国はアッシリヤに捕え移されました。同じようにモアブも、その偶像礼拝のゆえに捕え移されます。

48:14 どうして、あなたがたは「われわれは勇士、戦いの豪の者。」と言えようか。48:15 モアブは荒らされ、その町々は襲われて、えり抜きの若者たちも、ほふり場の下に行く。…その名を万軍の主という王の御告げ。…48:16 モアブの災難は近づいた。そのわざわいは、すみやかに来る。48:17 その回りの者、その名を知る者はみな、これのために嘆け。「どうして力ある杖、美しい笏が砕かれたのか。」と言え。

モアブが安心していたのは、財宝があり、作物があるだけでなく、戦いの勇士がいるからということです。その戦士たちも虐殺にあいます。そして、王権がなくなります。「力ある杖、美しい笏」というのが王権を表します。

48:18 ディボンに住む娘よ。栄光の座からおりて、潤いのない地にすわれ。モアブを荒らす者が、あなたを襲い、あなたの要塞を滅ぼしたからだ。48:19 アロエルに住む女よ。道のかたわらに立って見張れ。逃げて来る男、のがれて来る女に尋ねて、「何が起こったのか。」と言え。48:20 モアブは打ちのめされて、はずかしめられた。泣きわめき、叫べ。アルノンで、「モアブは荒らされた。」

と告げよ。48:21 さばきは次の平地に来た。ホロン、ヤハツ、メファアテ、48:22 ディボン、ネボ、ベテ・ディブラタイム、48:23 キルヤタイム、ベテ・ガムル、ベテ・メオン、48:24 ケリヨテ、ボツラ、モアブの国の遠近のすべての町々に。48:25 「モアブの角は切り落とされ、その腕は砕かれた。…主の御告げ。…」

ディボンは、アルノン川の北にある大きな町でした。そしてアロエルは、アルノン渓谷沿いの北側にある町です。そして平地の町々に対して、あらゆる町々が滅ぼされる様子を宣言しています。それで、角と腕、つまりモアブの力が砕かれました。

3B 高慢 26-39

48:26 彼を酔わせよ。主に対して高ぶったからだ。モアブは、へどを吐き散らし、彼もまた物笑いとなる。48:27 イスラエルは、あなたの物笑いではなかったのか。それとも、あなたが彼のことを語るたびごとに彼に向かって頭を振っていたのは、彼が見つけられた盗人のひとりであったためか。48:28 モアブの住民よ。町を見捨てて岩間に住め。穴の入口のそばに巣を作る鳩のようになれ。48:29 私たちはモアブの高ぶりを聞いた。実に高慢だ。その高慢、その高ぶり、その誇り、その心の高ぶりを。48:30 「わたしは、彼の高ぶりを知っている。…主の御告げ。…その自慢話は正しくない。その行ないも正しくない。」48:31 それゆえ、モアブのために私は泣きわめき、モアブ全体のために私は叫ぶ。キル・ヘレスの人々のために嘆く。

主は、モアブの高慢を取り扱われています。「酔わせよ」と主は言われますが、それは主の裁きの杯のことです。神の怒りを受けるその衝撃を、杯を飲むと表現しています。そして、大事なのは、彼らはイスラエルをかつて物笑いの種としていたけれども、今、同じように物笑いの種となっている、ということです。彼らはモアブの高原から、ユダの国がバビロンによって壊され、滅ぼされていたのを、まさに上から目線で見えていました。軍事的な同盟を結んでいた中ですが、実は心の中では、「ああ、お可哀想に。」と他人事のようにして眺めていたのです。ここには「高慢」があります。その高慢とは、「自分には降りかからない」という自信です。他人は裁かれているが、自分は裁かれないという自信です。そして主は、エレミヤによって泣きわめいておられます。モアブが泣きわめいているのに、自分もそれをご覧になるのが苦しくて、泣きわめいています。

48:32 シブマのぶどうの木よ。ヤゼルの涙にまさって、私はおまえのために泣く。おまえのつるは伸びて海を越えた。ヤゼルの海に達した。おまえの夏のくだものとぶどうの取り入れを、荒らす者が襲った。48:33 「モアブの果樹園とその国から、喜びと楽しみは取り去られ、私は酒ぶねから酒を絶やした。喜びの声をあげてぶどうを踏む者もなく、ぶどう踏み喜びの声は、もう喜びの声ではない。」48:34 ヘシュボンが叫んだため、その声はエルアレとヤハツまで、ツォアルからホロナイムやエグラテ・シェリシヤまで届いた。ニムリムの水さえ、荒廃した地となるからだ。

シブマやヤゼルは、ぶどうを作っているところで有名だったようです。そして、果樹園もなくなりま

す。その結果、喜びと楽しみがなくなります。主にある喜びでなく、自分たちのための喜びはこのよにしていつか無くなってしまふという事です。そして、ヘシュボンからずっと下のニムリムですが、北から南まで荒廃した地になります。

48:35 「またわたしは、モアブの、主の御告げ。高き所でいけにえをささげ、その神々に香をたく者を取り除く。」48:36 それゆえ、私の心はモアブのために笛のように鳴り、私の心はキル・ヘレスの人々のために笛のように鳴る。彼らの得た富も消えうせたからだ。48:37 彼らは頭の毛をみなそり、ひげもみな切り取り、手にもみな傷をつけ、腰に荒布を着けているからだ。48:38 モアブのすべての屋根の上や、広場には、ただ嘆きだけがある。「わたしがモアブを、だれにも喜ばれない器のように、砕いたからだ。主の御告げ。」48:39 どうしてこうも打ちのめされて、泣きわめくのか。どうして、モアブは恥を見、背を見せたのか。モアブは、その回りのすべての者の物笑いとなり、恐れとなってしまった。

モアブの高き所、彼らの偶像礼拝に対して神は裁きを行なわれます。彼らもペリシテ人と同じように、体毛を切り取り、また身に傷を付けて嘆いています。そして 36 節で、主はエレミヤの嘆きによって、その彼らの滅びる様を嘆き、悲しんでおられるのです。主は、滅んでいってしまうことについて決して喜んでおられません、嘆いておられます。ある方が言いました。「説教者は、地獄に苦しんでいる人々のことを泣いたことがないなら、地獄について語る資格はない。」と。

4B 恐怖 40-47

48:40 まことに、主はこう仰せられる。「見よ。彼は鷲のように飛びかかり、モアブに向かって翼を広げる。48:41 町々は攻め取られ、要害は取られる。その日、モアブの勇士の心も、産みの苦しみをする女の心のようになる。48:42 モアブは滅ぼされて、民でなくなった。主に対して高ぶったからだ。48:43 モアブの住民よ。恐れと穴とわなとが、あなたを襲う。主の御告げ。」48:44 その恐れから逃げた者は、穴に落ち、穴から上る者は、わなに捕えられる。わたしがモアブに、彼らの刑罰の年を来させるからだ。主の御告げ。」

40 節の「彼」とは、ネブカデネザルのことです。彼が翼を広げてモアブを一気に滅ぼします。そして 42 節、「民でなくなった。」というところが大事です。モアブは僅かな人々が残りますが、もうすでに民族の単位はなくなるのです。ペルシヤ時代にはモアブ人は民族としての形を失っていました。ここが、主によって選ばれたユダヤ人との大きな違いです。それから、モアブがどんなに這い上がっても、それでも罾に捕えられるというのは、神の裁きから免れることはできない、ということです。ある友人の宣教師が教えてくれましたが、彼の義父が、自分が不信仰であれば地獄に行くことを知って、「それでも私は地獄から這い上がる」と言ったそうですが、それは無理です。

48:45 ヘシュボンの陰には、のがれる者たちが力尽きて立ち止まる。火がヘシュボンから、炎がシホンのうちから出て、モアブのこめかみと、騒がしい子らの頭の頂を焼いた。48:46 ああ。モア

ブ。ケモシュの民は滅びた。あなたの息子はとりこにされ、娘は捕虜になって連れ去られた。48:47 しかし終わりの日に、わたしはモアブの捕われ人を帰らせる。・・主の御告げ。・・」ここまではモアブへのさばきである。

主は、彼らがバビロンに捕え移された後、僅かな人々がここにまた戻ってくる事ができるその慰めを教えておられます。しかもそれが、「終わりの日」と言っておられます。神の国の入る時に、民族としては失われているけれども、個々人の中でモアブ人が残されており、彼らが御国に入ることができるということです。これは希望であり、けれども、本当ならもっと多くの人が入って来ていいのに、という主の思いがあるでしょう。多くの人とその安らかな生活の中で高ぶって、そしてケモシュを自分の誇りとしていたために滅びました。イスラエルの神にルツのように従えばよかったのに、従うのは僅かだということです。

3A アモン他 49

49章には、他の五つの周辺国、バビロンによって攻められる国々に対する言葉があります。

1B アモン 1-6

49:1 アモン人について。主はこう仰せられる。「イスラエルには子がないのか。世継ぎがないのか。なぜ、彼らの王がガドを所有し、その民が町々に住んだのか。49:2 それゆえ、見よ、その日が来る。・・主の御告げ。・・その日、わたしは、アモン人のラバに戦いの雄たけびを聞かせる。そこは荒れ果てた廃墟となり、その娘たちは火で焼かれる。イスラエルがその跡を継ぐ。」と主は仰せられる。

アモンは、モアブの兄弟です。ロトによってアモンとモアブが生まれました。彼らは、ラバを都として、今のヨルダンの首都アンマンですが、そこに国を持っていました。そのアモンですが、彼らはアッシリヤによってガド族など、イスラエルが捕え移された後にその地を取ってしまったのです。そのところに、バビロンがやって来て彼らを滅ぼします。そして今度はバビロンが滅ぼされた後に、イスラエル人が帰還してそこにも住みつきます。主がアモン人のしたことに対して、復讐をされるのです。

49:3 「ヘシュボンよ。泣きわめけ。アイが荒らされたから。ラバの娘たちよ。叫べ。荒布をまとえ。嘆いて困い場の中を走り回れ。彼らの王が、その祭司や首長たちとともに、捕囚として連れて行かれるからだ。49:4 裏切り娘よ。あなたの谷には水が流れているからといって、なぜ、その多くの谷を誇るのか。あなたは自分の財宝に拠り頼んで、言う。『だれが、私のところに来よう。』49:5 見よ。わたしは四方からあなたに恐怖をもたらす。・・万軍の神、主の御告げ。・・あなたがたはみな、散らされて、逃げる者を集める者もない。49:6 そうして後、わたしはアモン人の捕われ人を帰らせる。・・主の御告げ。・・」

アモンは、ヘシュボンやアイなど、モアブと同じようにイスラエル人が捕え移された所を自分の者とした時がありました。そして谷や水があるといってそこを誇っていました。また財室にもより頼んでいました。これらを主は取り除かれます。イスラエルが神によって裁かれ、それを思っ主なる神を恐れるのではなく、むしろ貪って所有してしまったのですが、主はそのような自分の欲望で得たものを、取り除かれるのです。

そして、アモン人にも残りの民がいます。アモンはちょうど新約時代では、デカポリス地方です。そしてデカポリスと言え、悪霊レギオンから解放された人がイエス様に命じられて、福音を伝えられた所です。彼らにも希望が与えられました。

2B エドム 7-22

1C 役に立たない知恵 7-13

49:7 エドムについて。万軍の主はこう仰せられた。「テマンには、もう知恵がないのか。賢い者から分別が消えうせ、彼らの知恵は朽ちたのか。49:8 デダンの住民よ。逃げよ、のがれよ。深く潜め。わたしがエサウの災難をもたらすからだ。彼を罰する時だ。49:9 ぶどうを収穫する者たちが、あなたのところに来るなら、彼らは取り残しの実を残さない。盗人は、夜中に来るなら、彼らの気のすむまで荒らす。49:10 わたしがエサウを裸にし、その隠し所をあらわにし、身を隠すこともできないようにするからだ。彼の子孫も兄弟も隣人も踏みにじられてひとりもいなくなる。49:11 あなたのみなしごたちを見捨てよ。わたしが彼らを生きながらえさせる。あなたのやもめたちは、わたしに頼り頼まなければならない。」

次はエドムです。エドムはモアブの南、死海の南に位置するところにありました。そしてエドムは、ヤコブの兄エサウの子孫です。「テマン」はエドムの中の町の一つですが、テマンという名前がエサウの孫として出てきます(創世 36:11)。そしてヨブの友人の一人が、「テマン人エリファズ(ヨブ 2:11)」です。ヨブに助言を与えるべく、いろいろな知恵を与えようとしますが、そのようにテマンはその知恵で知られていました。けれども、その知恵もバビロンによる襲撃の前には無力であることが明らかにされるのです。そして、エドムの国を根こそぎ、そこにあるものを取っていきます。知恵に対して、私たちが誇っていないか？世の知恵は神の前で根こそぎにされます。

けれども、主の憐れみが僅かに書いてあります。ごくわずかに残された孤児、やもめは主ご自身がついていくのださる、というのです。私たちは自分たちでもはや守ることができない、と思っいても、実は主ご自身が守っていくのださるのです。

49:12 まことに主はこう仰せられる。「見よ。あの杯を飲むように定められていない者も、それを飲まなければならない。あなただけが罰を免れることができようか。罰を受けずには済まない。いや、あなたは必ずそれを飲まなければならない。49:13 わたしは自分にかけて誓ったからだ。主の御告げ。必ずボツラは恐怖、そしりとなり、廢墟、ののしりとなる。そのすべての町々は、永遠の

廢墟となる。」

主は、エドムが神の裁きを免れることができると思っています。それに対して、決してそんなことはないと言われ、念を押しておられます。他の民族、イスラエルの民と強い結びつきのない民族でさえ、神の怒りの杯を飲まなければいけなかった。ならば、なおさらのこと、ヤコブの兄であるエサウの子孫は神の怒りを受けることになるのだ、ということです。そしてエドムの首都ボツラが、永遠の廢墟となります。このボツラが、終わりの日にはユダヤ人の残りの者たちが逃げてくるところとなりますが、その後ここが滅ぼされるのでしょ。

2C 小さくされる民 14-22

49:14 私は主から知らせを聞いた。「使者が国々の間に送られた。『集まって、エドムに攻め入れ。戦いに立ち上がれ。』49:15 見よ。わたしはあなたを国々の中の小さい者、人にさげすまれる者とするからだ。49:16 岩の住みかに住む者、丘の頂を占める者よ。あなたの脅かしが、あなた自身を欺いた。あなたの心は高慢だ。あなたが鷲のように巢を高くしても、わたしは、そこから引き降ろす。…主の御告げ。…」

エドムは山々の中にあり、ボツラは岩に囲まれた町です。あのペトラに行けば良く分かります。エドムはこれだけの岩があるから自分たちは大丈夫だ、バビロンから攻められることはないと思っていました。ところがそうではなかったのです。主はその高慢を砕かれるために、バビロンを用いて彼らを打ち砕かれます。

そして、「国々の中の小さい者」となると言われます。エドムはバビロンによって襲われます。そしてその後、ナバタイ人によってそこを追い出されます。ユダの南の地域に強制移住させられますが、彼らは「イドマヤ人」と呼ばれるようになりました。そしてその時のユダにはハスモン朝があり、ヨハネ・ヒルカノスによってユダヤ教に強制的に改宗させられます。あのヘロデ大王はイドマヤ人です。ですから、彼らは国々の中の小さな者、さげすまれる者になりました。

49:17 エドムは恐怖となり、そこを通り過ぎる者はみな、色を失い、そのすべての打ち傷を見てあざける。49:18 ソドムとゴモラとその近隣の破滅のように、…主は仰せられる。…そこに人は住まず、そこに人の子は宿らない。49:19 「見よ。獅子がヨルダンの密林から水の絶えず流れる牧場に上って来るように、わたしは一瞬にして彼らをそこから追い出そう。わたしは、選ばれた人をそこに置く。なぜなら、だれかわたしのような者があろうか。だれかわたしを呼びつける者があろうか。だれかわたしの前に立つことのできる牧者があろうか。」

ソドムとゴモラは、エドムの北のところにある町です。アブラハムとロトの時代に、この町が滅んだようにエドムも滅ぼされる、ということです。そして、「ヨルダンの密林」とは、ヨルダン川の両岸のほんの数^キに広がっている林のことです。木々が生えていますが、そこにライオンが棲息していた

ようにすばやくネブカデネザルは襲います。彼のことを、「選ばれた人」と呼ばれます。彼の前に立ちただかる人はいない、なぜなら、主ご自身が彼を選んだからだ、ということです。

49:20 それゆえ、エドムに対してめぐらされた主のはかりごとと、テマンの住民に対して立てられたご計画を聞け。必ず、群れの小さい者まで引きずって行かれ、必ず、彼らの牧場はそのことでおびえる。49:21 彼らの倒れる音で地は震え、その叫び声が葦の海でも聞こえた。49:22 見よ。彼は鷲のように舞い上がっては襲い、ポツラの上に翼を広げる。その日、エドムの勇士の心も、産みの苦しみをする女の心のようになる。

エドムの倒れる音が、葦の海、つまり紅海まで聞こえます。エドムの最南端の部分です。つまり、エドムの全領域にネブカデネザルが襲います。

モアブ人やアモン人が捕われ人が帰ってくるという約束があった一方で、エドムにはありません。むしろ永遠の廃墟が定められています。エドムはヤコブの兄であるにも関わらず、です。これはオバデヤ書、エゼキエル書に詳しく書かれていますが、彼らは弟ヤコブの子孫、ユダヤ人をいつまでも憎しみ、恨み、彼らがバビロンに捕え移される時に助けることなく、むしろそこを取ってしまったからです。こうした高ぶりが、彼らを永遠の滅びに定めてしまいました。

3B ダマスコ 23-27

49:23 ダマスコについて。「ハマテとアルパデは恥を見た。悪い知らせを聞いたからだ。彼らは海のように震えおののいて恐れ、静まることもできない。49:24 ダマスコは弱り、恐怖に捕われ、身を巡らして逃げた。産婦のような苦しみと苦痛に捕えられて。49:25 いったい、どうして、栄誉の町、わたしの喜びの都は捨てられたのか。49:26 それゆえ、その日、その若い男たちは町の広場に倒れ、その戦士たちもみな、断ち滅ぼされる。・・万軍の主の御告げ。・・49:27 わたしは、ダマスコの城壁に火をつける。その火はベン・ハダデの宮殿をなめ尽くす。」

シリアに対する神の裁きの宣告です。ハマテとアルパデはダマスコの北にあるシリアの町ですが、そこにバビロンが襲ってきています。それでダマスコが恐怖で弱っています。「栄誉の町」とありますが、ダマスコは古代からある都市です。そこにアラム人が住んで、知られるようになりました。ですから、その歴史と強さを誇っており、主も喜んでおられたようです。ところが、捨てられます。そして、「ベン・ハダデ」は、イスラエルをしばしば攻撃していたシリアの王の名前として出てきます。元々の意味は「神々の息子」ですが、その力を象徴するベン・ハダデが火で燃え尽きてしまう、ということです。イスラエルの神を知ることができたのに、そうではない神々をあがめていた、そのことに対する裁きであります。

4B ケダル・ハツォル 28-33

49:28 バビロンの王ネブカデレザルが打ったケダルとハツォルの王国について。主はこう仰せら

れる。「さあ、ケダルへ攻め上り、東の人々を荒らせ。49:29 その天幕と羊の群れは奪われ、その幕屋もそのすべての器も、らくだも、運び去られる。人々は彼らに向かって『恐れが回りにある。』と叫ぶ。49:30 ハツオルの住民よ。逃げよ。遠くへのがれよ。深く潜め。…主の御告げ。…バビロンの王ネブカデレザルは、あなたがたに対してはかりごとをめぐらし、あなたがたに対してたくらみを設けているからだ。49:31 さあ、安心して住んでいるのんきな国に攻め上れ。…主の御告げ。…そこにはとびらもなく、かんぬきもなく、その民は孤立して住んでいる。49:32 彼らのらくだは獲物に、その家畜の群れは分捕り物になる。わたしは、こめかみを刈り上げている者たちを四方に吹き散らし、彼らに災難を各方面から来させる。…主の御告げ。…49:33 ハツオルはとこしえまでも荒れ果てて、ジャッカルに住みかとなり、そこに人は住まず、そこに人の子は宿らない。」

「ケダル」はイシュマエルの息子の名(創世 25:13)で、アラビア人です。遊牧民なので、ここでバビロンが彼らを攻めた時、「その天幕と羊の群れは奪われる」とあります。「ハツオル」は、イスラエルの北部にあるカナン人の町「ハツオル」とは違います。アラビア半島のどこかにあると考えられます。

ケダル人も、モアブと同じように「安心して」生きていました。けれども理由が違います。モアブはその財産に頼っていましたが、彼らは「孤立して」生きていることで安住していたのです。他の外の世界と離れて、遊牧民としてわが道を行く生活を送っていました。このようにして、自分だけで生きることによってそこにある高ぶりがあります。しかし、主は人と人をつなげます。その中でご自身を知ることができるようにされます。

5B エラム 34-39

49:34 ユダの王ゼデキヤの治世の初めに、エラムについて預言者エレミヤにあった主のことば。49:35 万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしはエラムの力の源であるその弓を砕く。49:36 わたしは天の四隅から、四方の風をエラムに来させ、彼らをこの四方の風で吹き散らし、エラムの散らされた者がはいらぬ国はないようにする。49:37 わたしは、エラムを敵の前におののかせ、そのいのちをねらう者たちの前におののかせ、彼らの上にわざわいを下し、わたしの燃える怒りをその上に下す。…主の御告げ。…わたしは、彼らのうしろに剣を送って、彼らを絶ち滅ぼす。49:38 わたしはエラムにわたしの王座を置き、王や首長たちをそこから滅ぼす。…主の御告げ。…49:39 しかし、終わりの日になると、わたしはエラムの捕われ人を帰らせる。…主の御告げ。…」

最後は「エラム」に対する預言です。エラムは今のイランのところにあった州です。ペルシヤ時代には、エラムがペルシヤの中心的地域となりました。エラム人は弓で有名でした。けれども、その力と誇りを主が砕かれます。バビロンが攻めてきてエラム州にも王座を設けました。けれども、慰めがあります。ここにエラムの捕われ人を帰らせてくださるのです。

使徒の働き 2 章を読むと、五旬節に聖霊が下られ、弟子たちが外国の言葉を語り始めました。

それを聞いていた各地からエルサレムにやって来ていたユダヤ人の中に「エラム人(2:9)」がいます。そして終わりの日ですから、イエス様が再び戻ってこられる時も、神に立ち上がる人々が起こされるのです。今、イランでは大リバイバルが起こっていますが、この箇所を今に当てはめる人もいます。イラン人は世界に散らされています。いろいろな国に住んでいます。そして王座というのは、キリストがそこに座しておられるということです。イラン人がイエス様を信じていく、主に立ち返っている、という適用です。

このようにして、バビロンによる捕囚がユダのみならず、それぞれの国に対する神の宣告でもあったことがここから分かります。そしてユダに対しては、彼らが主に従わなかったという明確な離反があります。しかし、異邦人もそれぞれが主の証しを受けていながら、それを拒んだという罪があります。アモン人は富で救われようとしていました。エドム人は知恵、また岩によって救われようとしていました。シリヤ人は、榮譽によって救われる。ケダル人たちは、孤立していることに救われようとしていました。そして、エラム人が弓によって救われようとしています。私たちが、何に頼っているかを吟味しましょう。